

江戸川柳を楽しむ 神田忙人
こしかたを思うなみだは耳に入 (いり)
今迄の薬をけなしけなし盛り
困 (かこわ) れに地ごくは無いと実 (じつ) をいい
足音で男をかくすおもしろさ
陰陽師 (おんみょうじ) やばな女郎に買 (かい) あたり
だんだんにそんならの出るおもしろさ
出会茶屋男のかわるつらにくさ
げかの供とかくいさいを聞きたがり
死んでから親は添わせてやりかたり
居る所 (とこ) を見たのが竹のふき納 (おさめ)
能 (よ) く寝ればねるとのぞく枕がや
はえば立てたてばあゆめの親心
赤児の () かかと朝日かがやく
あの金をどうするのだと息子いい
ある上をのぼすがむす子気にいらず
なに親をだましましょうと息子いい
叱られる度にむす子の年がしれ
どういうりょうけんにむす子こまる也
似合ったといわれて娘子をすてる
いい娘母も惚人 (ほれて) の数に入り
こせこせこせこせと母親は叱り
どうするか見ろとお袋どうもせず
ためといていわっしゃるぞと母おどし
だまされるたびに母おやちえが出る
丸綿をかぶせながらもいいふくめ
ちとずつ母手つだってどらにする
是ばかり着て来やると里の母
こわい事親父ふだんの顔で居る
おやのやみただ友だちが友だちが
おやの気になれとはむりなしかりよう
親の名に次第に似合う三回忌
あれがほっそりかと仲人呼びつける
姿見も日の出たような色直し
ぬかみそへ思い切る手のうつくしさ

女房の留守内中（うちじゅう）がわんだらけ
勝ったなら逃げて来なよと女房いい
勝ちまけはともあれ女房本目はり
やつれたる女房の来る古いかけ
女房はなんぞの時を待つて居る
能い後家が出来ると咄す（はなす）いしや仲間
あれまでの寿命と後家のほぐれ口

元旦は祝てねろとゆりおこし
上がるなといわぬばかりの帳をだし
宝船さかさによんで下女かんじ
長き夜の遠（とわ）の眠りのみな目さめ浪のり舟の音のよきかな
やぶ入の母へのみやげは髪の出來
藪入りの内母おやは盆で喰い
雛の酒すそにかかればあじに見え
ものかかぬ女淋しいあまの川
祭の子わらって通る内のまえ
足ばかり出来てあわれな十五日
夜そば切ふるえた声の人ばかり
十二月人をしかるに日をかぞえ
翌（あす）しらぬ生簀（いけす）の鯉の餌になつき

がくぜんとまたたきをするひきがえる
鶏の何か言いたい足づかい

もてんとすべからずふられじとすべし
三會目わたしゃつめとうありんすよ
寝なんすとつめりいすと三會目
ぐっと寝てやりんしたとはむごいやつ
きぬぎぬの口舌（くぜつ）は帯を手にからみ
きぬぎぬの跡は身になる一（ひと）ね入（いり）

図星

新妻「結婚以来、夫は馬鹿なことばかり考えているのよ」夫の友人「でもね、結婚前のほうが、もっと馬鹿な事を考えていたように思われます」

診断の基準

ある医師に弟子が尋ねた

「先生は患者を診る時に、いつも何を食べたかをお尋ねになりますが、何か…」「しっ！」
医師は慌てて弟子を制して言った。「診察料を決める参考にしとるんじゃ」

楽しみ

間違い電話

もしもし、何々ですが、昨日、電話するよういわれたものではあ…何々さんって、誰か電話した？そう、皆知らないの
シンサで 来てくれと言われたのですよ

はあ 誰も知らないのね

初めての人でも いいんですか

もちろんですよ

保険証を持って行けば良いんですね

はい よろしく

運転免許証は必要ですか

はあ?? ありませんが??? 何番にお掛けですか

oooooですが

合っていますが、なんと言うところにお掛けですか

ooローンでしょう

「タバコ吸う？」

男が尋ねた「いいえ」「酒は飲むの?」「いいえ」「じゃ男遊びは?」「じゃ何が楽しみで
生きているの?」「うそをつくのが楽しみなの…」

あなたが先

彼女は飛びっきりの美人であったが、多少おつむが弱かった。

ある日、彼女は医者にかかった。「すぐ診察しましょう」と医者は言った。「服を脱いで
ください」「いいわ、先生」と顔を赤らめながら言った「でも、あなたが先よ」

ソクラテス

彼は、娘の頭を自慢している

「うちの娘はなにかというと、ソクラテスはどうの、アリストテレスがどうの、プラト
ンがどうのと言うだ」「へえ、アメリカの男は嫌いなのかね？」

現実主義者

いささか歳を取りすぎたしかし金持ちの恋人を持っている若い娘が、交際をやめるべき
か続けるべきかを筋の通った母親と話していた

「お母さん、彼ったら、私の亭主にするにはちょっと歳を取りすぎていると思わない?」
すると母親答えて「お前。あのひとは、亭主にしないでおくにはちょっとお金持ち過ぎ

るとは思わないかい？」

任せる

彼は娘の婚約者に言った。「娘はきみの妻になることを承知したんだね。それで、きみたちは結婚式の日取りをもう決めたのかね」「お嬢さんにお任せします」「教会ですのかね。それとも内輪で済ませるつもりかね」「お母様にお任せします」「どうやって生計をたてるのかね」「お父様にお任せします」

もう大丈夫

真夜中。けたたましい電話のベルで、医者はたたき起こされた。電話に出ると、すっかり取り乱した男の声が聞こえた。「もしもし、もしもし、息子…息子が、コンドームを飲み込んでしまって」「よろしい。心配ご無用だ。すぐ行きましょう」電話を切り、医者がパジャマから服に着替え終わった時、再び電話が鳴った。医者が大急ぎで電話に出ると、先ほどの男の声がした。「もう、けっこうです。先生。ほかのが、もう一つ見つかりましたから」

それが不思議

思春期の娘が母親に尋ねた。「お母さん、どあしてお父さんと結婚するようになったの」母親が感慨深げに答えた「そうかい、おまえもそれが不思議だと思ようになったんだね」

いちばん偉いのは…

父親が息子をしかりつけた

「どうしておまえは、お母さんの言うことをきかんのだ。おい。おまえは、おれより偉いとでも思っているのか」

がらくた市

ある小さな町の新聞に次ぎのような「お知らせ」が出ていた。

「来週水曜日の夕べに当婦人会は、教会において『がらくた市』を催します。置いておく価値は無いけれど、放棄してしまう訳にもいかないものを処分するチャンスです。どうぞ、ご主人をお連れ下さい」

意志が強い

「奥さん、わしゃ三日間何も食べておらんで・・・」と乞食が言うと「まあ、私もあなたみたいに意志が強ければ…」とその太った婦人が言った。

結婚相談所

客「持参金五万ポンドの女の人の写真を見せて下さいませんか」係「持参金一万ポンド以上の女の人は写真不要となっています」

一夜の宿

自動車の事故のために、二人の友人が暗夜の野道で途方にくれ、ついに人里はなれた一軒屋の未亡人のところへ一夜の宿を乞う羽目となった。それから一年、二人の友人が、出会ったとき、一人がこう言った。

「覚えているだろう、去年の秋ぼくらを泊めてくれた未亡人の婆さんを。あの婆さんのことで、最近弁護士から手紙が来たよ」「へええ…」と、相手は赤くなった。「きみはぼくに内緒であの婆さんを楽しませたんだろ。どうだい」「うん、実はそうなんだ」「その上、恥ずしがって、ぼくの名前を名乗ったんじゃないかかね」「実はそうなんだ。それを怒っているのかい」「いや、起ってしないよ。むしろ感謝しているのさ。あの婆さんが最近死んで、ぼくに遺産を全部よこしたんだからね」

知らぬが仏

「ママ、パパがね、もしパパが生まれてなかったら、あたしも生まれなかったって言うの」「パパわね、ご自分がちっともわかっていないことを得意になってお話することが好きなの」

先見の明

レストランで夕食を取っていた夫婦。食後、給仕がコーヒーをすすめると、亭主がことわって言うのには「」いや結構。妻がブラックでコーヒーを飲むと、わたしは一晩中寝られないのでね」

問「女性の盲腸はどこにある？」答「入って左側」

わかっていない

医者が病人に言った。「魚と肉はたべてはいけませんよ」すると病人は言った「それが手にはいるくらいなら、もともと私は病気にはならなかったはずなんだ」

擬音

ある人、客と話をしている、うっかりブゥッと一発やらかして、ごまかそうと思い、指で椅子をこすって音を出した。すると客が言った。「やっぱり最初の音がそっくりですなあ」

男と女

「男の人に何か言っても片方の耳から入ってもう片方の耳に抜けてしまう」女が言った。「女になにか言うと」すかさず男が言い返した。「両方の耳から入って口に抜ける」

女

聞いた話をすべて信じることはできないけれど、それを他人に話すことはできる。

心以外は…

「今まで、あなたの心に触れた異性はいなかったのね」「ええ。でも、心以外は全部触れられたわよ」

哲学者

世辞にも長けているという評判の老哲学者にある女がたずねた。「先生、この世で最も好奇心をそそる存在は何ですか」「そりゃ、キミ」と女をジロリと見て答えた。「好奇心のない女だよ」

妻を持つ意味

すべての男は妻を持つべきである。ときには、政府のせいにはできないものも必要だから。

デザート

結婚とは、延々と続く宴のようなものである。唯一の違いは、最初にデザートが出ることである。

生きてるよ

男が炭鉱の事故で大怪我をして、病院に収容された。ベッドのそばで、心配そうにのぞき込んでいた男の女房に、診察を終えた医者が告げた。「お気の毒ですか、お亡くなりになりました」寝ていた男はそれを聞いて驚いた「ちょっと待ってくれ、おれはまだ生きているよ！」「お黙りあんたに何がわかるっていうの！」男の女房がしかりつけた。

プロポーズ

「じゃ、何人もの男にプロポーズされたと言うんだな」亭主は怒り狂って問いつめた。「そうよ、何人もよ」と彼女は答えた。「それなら、最初にプロポーズしたうすのろと結婚してほしかったよ」「したわよ」

それが心配

「うちの主人たら、株で全財産をなくしてしまったのよ」隣の奥さんに話し掛けた「まあひどい。ご主人、とてもお気の毒ね」「そうなの。わたし、彼が私まで失ってしまうんじゃないかと心配していますの」

それならば

三人の男の子と遊んでいた八歳の子供が飛び込んできた

「ママ、ママ」息を切らしながら尋ねた「あたし、赤ちゃんを産める？」「いいえ」ママは静かに言いかけた。「あと六、七年経たなければ産めないのよ」「いいわ、みんな！」子供は庭に駆け出しながら叫んだ。「ママとパパの遊びをしましょう！」

結婚の翌日、

友達が尋ねた。

「あのことは、さしずめピカソみたいだわ。すきかすきでないか、どちらかよ」

フランス人

噛みがフランスをつくった。気候が温暖、畑が肥え、牧草地が広く、河が多く、ぶどう酒がうまく、海の幸、地の幸に恵まれ…申し分のない国であった。

紙は天の上からこのフランスを眺めて、「しまった！」と後悔のほぞをかんだ。
「こんなに素晴らしい国では、ほかの国々からねたまれてしまう！」
そこで、紙は性の悪いフランス人をつくって、そこへ住ませた。

マストロヤンニ

私にいわせると、女性には二種類しかない。お金がなくても、男がいたほうが良いというタイプか、男がなくてお金があったほうが良いというタイプだ
「書留を受け取ったでしょう」「うん」「誰から？」「なんで、そんなこと知りたいんだ？」「あらっ、あなたって、好奇心が強いよね！」

運転

自動車の中、助手席の妻がハンドルを握っている夫に
「右にきって！気をつけて！ブレーキ！」同乗の母親は「左へ曲がって！静かに走って！よもうちょっとスピードをあげて！」かんしゃくを起した夫は妻に「いい加減にきめてくれよ。だれが運転するのか。お前か。それともお前のお袋さんか」
「先生は、超能力というものの存在を信じないでしょうね」「いや、信じていますとも」
「具体的なご経験があるわけですか？」「妻の勘のよさなどをみていると、信じないわけにはいきません」

コルヌート

サッカー競技場で、観客席の女性が猛烈な勢いでレフェリーに向かって叫んでいる。
「コルヌート(妻を寝取られた男)、コルヌート」脇の男が腹立たしげにいった。「静かにしてくださいよ。お願いですから。だいたい、そんなひどいことを、根拠もなしにいつてはいけませんよ」「根拠なしにですって？あれは、わたしの夫ですよ」

母と父の違い

母となること、これは事実の問題である。一方、父となることは常に公衆の世論の問題なのである。リドバス

友人の息子のジミーを預かった婦人が食事の用意をした。「あなた、自分で肉が切れますか？」と婦人は、ジミーが悪戦苦闘しているのを見て言った。「ええ、できます」「ぼくんちでもこのくらい固い肉はよく出ますから」
映画館で。「よく見えるかい、お前」「ええ」「すきま風は来ないかね」「ええ、暖かですよ」「椅子の坐り心地はどうだね」「とても楽ですわ」「そうか、それじゃ席を替わろう」

ちっぼけな国のスイス

なのに、そのうえ二十二州に分かれて郷土愛からいがみあう。
ホームに到着した長距離列車に、駅長は声を限りに叫ぶ。「ジュネーブ、ここはジョネーブ！」それから、最後部の車両までずっとんでいって、「ここも、ジュネーブ」
レマン湖の白鳥が群れをつくりだしたのはいつか？
日本の観光客が訪れだしてから。

フランス料理

「フランス料理に、なぜデザートがつきものなのか?」「不味い料理に、最後まで期待をもたせるためである」

ハダカになった人間の男を見て、象が言った。「あんなもので、どうやって息ができるんだ?」

乞食

ひとりの婦人が乞食に向かって「だけど、あんたの身の上話、機能あたしに話したのとまるで違うわね」「もちろんですとも奥様。奥様はきのうの話などほんとうとは思ってらっしゃらないでしょう」

プロポーズ

それで、我々の結婚についてご両親の意見はどう?

「わかんないわ、父はなんにも言わないし、母は、母は、反対するために、父が何か言い出すのを待っているのよ。」

いらだち

結婚式の夜、マリーにとっては、始めてであった。彼女はやり切れなくなって、突然叫んだ。

「ねえ、トム、入ったり出たり入ったり、どっちにするのよ。私いらいらするわ!」

おしゃべり

おしゃべりはダメだ。——ただし、相手が交通係りのお巡りでなければだが

免許証

女性ドライバーが駐車場から車を出そうとしていた。彼女の運転はひどいもので、前の車にぶっつけ、あわてて後退してこんどは後の車に衝突するという始末。やっとのことで道路に出たが、折から通りかかった配送トラックに衝突してしまった。そこにその一部始終を見ていた警官が寄ってきた。「奥さん」警官が言った。「免許証を拝見します」「あなたってばかじゃないの」女性ドライバーが答えた。「いまのみんな見てたんでしょ。あれで誰がわたしに免許をくれると思って?」

もう十分に

交通警官が違反切符をきろうとしたとき、後部座席の女性がわめきだした。「ほら、みなさい。気をつけろってあれほど言ったでしょう。なのにあんたったら、あたしの言うことを全然きかないんだから。車線はオーバーする、信号は無視する、スピードは出しすぎる。ほかにもいろいろやったじゃないの。だから言ったでしょう、きつとつかまるって、あんた。ええ?言わなかったの?」「このご婦人はどなたですか」と警官はきいた。「家内ですよ」「なるほど、よろしい。行って結構です」と警官は言った。「これ以上さらに罰を受ける必要もないでしょう」

お客さん

警官になってしあわせだという者もときにいる。ある百貨店の売り場主任が転職してお巡りになった。その理由をきかれて彼は言った。「給料や勤務時間はまあまあだけど、最高にいいのは、いつもお客さんのほうが悪いってことですよ」

亭主の職場

これが最後の二十ドルなのよ」泥棒の妻がぐちをこぼした。「あんた、早くお金をなんとかしてくれなくちゃあ」「わかっている、わかっているよ」泥棒が答えた。「だけどお前、銀行が閉まるまで待ってくれよ」

まだ早い

暴行罪で訴えられた男、法廷で有罪か無罪か申し立てるように求められた。「それはちょっとご猶予願いたい」その男は答えた「証拠を聞いてからにしたいと思いますので」

熱弁

若い新米の弁護士が、ある農民から訴訟を依頼された。それは鉄道会社を相手取ったもので二十四頭ものぶたが輸送中に失われたというものだ。

若い弁護士は張り切った。陪審員たちに深い印象を与えようと大見得を切ったのだ。「陪審員のみなさん、二十四頭、二十四頭ものぶたですよ」彼は十二人の陪審員席を思いをこめて眺め渡した。「じつに、みなさんの二倍のぶたなのです」

最低の職業

その証人は、原告側の弁護士に手荒い尋問を受けていた。「それで、あなたの職業は何だと言いましたかな」弁護士が尋ねた。「日雇い労務者です」証人が答えた。「おや、日雇い労務者ですって」弁護士がばかにしたような口調で言った。「それであなたはどう考えますかね。日雇い労務者というのは、この社会でどういう階層に属するかということについて」「もちろん高い階層にあるとは思ってませんや」証人が言った。「でもね、私は、私のちちよりはりっぱな階層だと思っていますよ」「あなたの父上の職業は何だったのですか」弁護士が尋ねた。「彼は口先だけの男でした。弁護士だったんです」

嫌味

「あなたは、あなたの立場にふさわしい知性の持主だと思いますが」反対尋問で、はっきり敵意をもっている証人に手を焼いた弁護士が、皮肉たっぷりに言った。「宣誓してなければ」証人が言い返した。「私もあなたのそのお世辞をそっくりあなたにお返しできるのですがね」

最後の五セントまで

何年もかかって一向に埒のあく気配がみえない訴訟にうんざりした実業家が顧問弁護士に訴訟を取り下げる相談をした。「なにをばかな」と弁護士は一喝した。「あなたの持っている最後の五セントを使い果たすまで、徹底的に闘うべきですよ」

被告の弁護士は最後の弁論で陪審員にこう訴えた「被告は白痴のような話し方をし、白痴のように振舞っております。しかし、陪審員の皆さん欺かれてはなりません。彼はほんと

うに白痴なのです」

無罪

途方にくれた様子でその男は法廷に立っていた。彼はどうなっているのかまったく理解できない様子だった。弁護士が言った。「あなたは釈放されたんですよ」「えっ、そりゃ、どういことなんで」「つまり、あなたはもう自由だってことです。あなたは無罪になったんです」「おう、それはそれは」男が言った。「それで、あつしが盗んだものはどうなるんでしょう。あつしが持っててもいいんでしょうか」被告が尋ねた。

正義は勝つ

それは極め付きの難しい裁判だった。弁護士は秘術をつくして闘い、遂に勝った。弁護士はさっそく彼の依頼主に電報を打った。「セイギ ハ カッタ」すぐに返電が届いた。「タダチニ コウソ セヨ」

分別のある魚は下流へ、ない魚は上流めざして泳ぐ

ナッシュ

薔薇はかいで眺めるだけにせよ。摘み取られなければ、棘に刺されることもない。

ヘイ

人に知られずひっそり咲いて、むなしくすがれる美しい花がまことに多い。グレイ
現在を静かに楽しんでいるという点では、動物のほうが人間よりも賢い。

ショウペンハウエル

猫はいろんな病気にかかりやすいが、不眠症だけにはならない。クラッチ

詩こそは、詩聖ミルトンの目が見えなくなったきに、見たものだ。マークス

夢のように作られて、短い人生は眠りでおしまい。シェイクスピア

人生を夢見ていないのなら、絶望することもないだろう。アーノルド

希望もなしにパンを食べるのは、ゆっくり飢え死にすることだ。バック

自然のすべては、「食べる」「食べられる」という動詞の活用にある」インジ

小心のためにしらふの男は酔っ払う。酔っばらって、勇ましい男は小心になる。

チェスタトン

涙にぬれたパンでも、ただ冷たくて味気ないのよりまし。パーカー

人生の大目的は、知ることではなくて、することにある。ハクスレイ

昨日は取り返せないが、明日は勝っても負けても我らのものだ。ジョンソン

同じように、しかし別々に人は生まれる。フロム

太陽も月も、雲でかせげる

シェイクスピア

夏の花は、秋に燃え立つ。 スティヴンソン
夜になる前に、昼をほめるな フラー

暗闇の中で娘は兵士にささやいた。

「十五分以内にやめないと、ほっぺたをぶつわよ」

画家が、当惑顔のモデル嬢にたずねた

「男性の前でヌードになるのは、はじめてなのかい」「そうじゃないけど、男の人が脱がないのは初めてだわ」

「ミーナ、愛しているよ。結婚してくれるかい?」「いいえ、でも、見直したわ」「見直したって、なにを?」「あなたは、あんがい趣味がいいってことをよ」

ある夫人が、仲好しの友達にこぼした。「うちの主人ときたら、ひどいのよ。もう一年以上も前から耳が遠いんだって。昨日初めて、そういうのよ」

リビエラ海岸で「昔は付けるものが無ければ、海水浴をしようとは考えなかったものだが、最近はミニつけるものがなくても堂々と出てくる」

同意

「思い出すね、夫婦そろって『ハイ』と同意したのは、結婚式の日が最後だったよ」

長所

「結婚したくらいなのだから、ご主人にも長所があったのではないですか?」

「はい、ありました。でも、わたしがみんな使い果してしまったのです」

狙い

「判事さん、もう、わたしは女房とはいっしょに暮らせません。とにかく乱暴なんです。十年前から、あたしの頭めがけて、お皿をぶつつけるんですから」「それでいまごろ、離婚申請をするというのは、どうしてですか?」「最近、ねらいが正確になってきたのです」

意志の強さ

ジェノバの病院で「驚きましたね。もう助からないと思ったのに。よくなったのは、あなたの意志の強さのおかげですよ。」「先生、治療費を計算する時も、そのことお忘れなく」

高名な外科医

に、患者がお追従まじりでいった。

「先生ぐらい有名になると、この世に敵も多くなるでしょうね?」医者はまじめくさって答えた「いいえ、あの世にいる敵にくらべたら、物の数にもなりませんよ」

七歳の息子が父親に尋ねた。「お父さんは、なぜ、お母さんと結婚したの?」「お前までそれをきくのか?」

手術が失敗

して、巨万の富を持つM氏が死んだ。遺産が配分された。その時、外科医かの高額な請求書が届いた。あまりの高さに抗議をした。

医者はいった。「もしも、手術が成功していれば、貴方たちには遺産ははいらなかったのですよ」

盲腸

真夜中に医者は叩き起こされた。「もしもし、家内が急性盲腸炎のようなので、すぐ来てください」「でも、おかしいですね。お宅の奥様は急性盲腸炎になるわけがありません。きっと、単なる腸炎でしょう何か腸の薬があったら飲ませて様子を見てください。」

「いいえ、ほんとうに、急性盲腸らしいのです。ひどく、苦しんでいるのです。すぐに、来てください」「でもね奥様は昨年その手術をしているのですよ。二個盲腸を持っている人なんて、聞いたこともありません」「そりゃ、二個の盲腸を持っている人はいないかもしれませんが、二人目の細君をもらう男はいくらでもあるじゃありませんか」

幽霊

ある大外科医に誰かが聞いた。「先生、あなたは幽霊をお信じになりますか」すると外科医はこう答えた「幽霊か、もしもわしが幽霊を信じていたら、もうずーと前に、商売を変えていたね」

妻が妊娠し

妻が妊娠し、産婦人科をおとずれた。診察の後、何か極く小さな字を印刷してある紙を妊婦の下腹部に貼り付けた。夫はその紙の話を聞くと、奇妙に思って読んでみようとしたが、小さすぎて読めない。そこで、拡大鏡を使って読んだ。『この字が拡大鏡を使わずに肉眼で読めるようになったら、すぐ病院にきてください。そろそろ、生まれます』

立派な身なりの紳士がかわいい男の子を連れて、パリの大きな理髪店に入ってきた。そして、大急ぎの用事があるので、自分を先にやってほしいと言った。髪ができあがると、紳士は「じきにもどってくるから」と言って、子供を置いて出て行った。

子供の髪がすんで、一時間たち二時間たったが紳士はもどって来ない。子供はポツネンと待っている。「大丈夫だよ。パパはすぐ戻ってくるから」と理髪師は子供をなぐさめた。すると、子供はこう答えた。「あれはぼくのパパじゃないよ。道ばたでであったら、『髪を刈りにいこう』って、ここへ連れて来たのだ」

若い娘が産婦人科の診察を受けにきた。医者は明瞭に妊娠の兆候を認めた。「結婚しているのですか」「いいえ」「では、恋人がいますか」「いいえ、恋人もありません」医

者はそう聞くと、すぐに立って窓をあげ、夜の空を眺めた。娘は変に思って、そとになにかあるのですか」と聞いた。医者が声を潜めて答えた。「二千年前にもこうしたことが一度ありましてね。その時は東の空から星があがったのです。今度も見逃しちゃいけないと思ったのです。」

視力低下

中年の女の患者が訴えている。「先生近頃とても目が悪くなってしまいました。トイレに行っても、自分のオシッコさえよく見えないのです。」医者は頷いた。「では、この薬を毎日飲んでください」「これを飲むと目がよくなるのですか」「いいえ、目のほうは良くなりませんが、オシッコの色が濃くなります」

夜が過ぎて

いった。娘は家に帰ってきた。時計は四時を指していた彼女の目からは無邪気さが消えていた。けれど、彼女の顔には微笑があった知識を得た者の満足の微笑が

主観的事故

医師は妊娠している娘に向かって言った「保険が利くのは、本当の病気とか事故だけなんですよ」

娘は 不正請求扱いに抗議した。「だってわたしが妊娠したのも事故なんです」

美しい見習い

看護婦が医者のところへやって来た。「先生、あの患者はとても脈が早いんですけど、どうしたんでしょう」

医者は首を竦めて答えた「今度脈をとるときは、胸のボタンをかけなさい」

費用

の・のどに骨が刺さりました。幾ら掛かってもいいですから、と・取って下さい
大変難しい手術は成功した

お・お幾らですか・・・

貴方が、苦しかった時に考えた金額の半分でよろしいですよ

びっこ

外科の教授が講義する

「この患者の場合は左足の筋肉が萎縮している。だから左足は右足よりも短くな、そのためにびっこを引く。君だったらこの場合どうするかね」

教授は一人の学生の顔を見る。学生「私も…びっこを引きやしないかと思います」

父親が有名な

医者。その息子も医者になった。ある日、息子は父親に自慢した

「親父が十年 かかっても治せなかった患者を、息子の僕が全快させたんだから」「よく我慢してくれた患者だよ。あの人の払いでお前が勉強もできけば、医者にもなれたんだからな」と父親が言った。

棒読み

報告者が長いこと、もそもそと文書を棒読みしている。聴衆の後ろの席から

「もう少し大きい声で願います」と声がかかった。

「失礼。誰も聞いてはいないとおもったもので…」

あればいい

オールドミのスのジェーンが、若いペギーに言った。

「私は若いころを思い出すだけでも腹が立つわ」

「何があったのですか」「何もなかったのよ」

「私きのう、ひとりで本を読みながらそれは静かな夜を過ごしたわ

「私にもいつかそんな夜がやってきそうで心配だわ」

処女

神父が、声を張り上げ、熱のこもったお説教をしていた。

「セックスは醜い。私は、今日、純真な乙女だけに話をしたい。今、ここに集まっている人の中で処女の人全員立ちなさい」

教会はしんと静まり返って誰一人立ちあがる者はいなかった。しばらくして、セクシーな金髪の女が子供を抱いて立ちあがった。「私は処女と言ったのだ！」神父は怒って女に言った。「神父さん、二ヶ月の女の子に自分で立てっていうんですか？」

お次が問題

セリエがエドナに言った。

「あなた秘密を守れる？」「守れるわ。でも次の女ヒトが守れるかどうかはわからないわ」

オールドミス

のキャロルがジーンに得意げに言った。

「私は、もう何千回と結婚してくれって頼まれたわ」

「知っているわ、頼んだのはあなたのお父さんとお母さんでしょ」

古い事件

「ねえ、あなた。今日は私たちの四十回目の結婚記念日よ。なにかお祝いをしなくちゃ。にわとりでもしめしようかね」朝起きて、農家の妻が夫に言った。

「なんて事を言うのだ。」と夫が答えた。「四十年も昔のことで、どうしてにわとりが首をしめられなくちゃなんねえんだ？」

忙しい

オス猫が狂ったように路地を走り回っていた。非常階段を駆け上り、またすごい勢いで降りてくると、今度は、地下室にすっ飛んでいき、すぐ、横っ飛びに駆け上ってきた。それを見ていた近所の人々が、猫の持ち主に電話をした。

「あんたの猫が、気が狂ったようじゃまわっているよ！」

「そうなんだ。去勢したもんだからね、婚約の解消に走り回っているんだ。なにしろ壮んな奴だったからな」

考えすぎ

有名な医学者が、講義のとき、一人の女子学生に向かって尋ねた

「刺激されると六倍の大きさになる人間の器官は何だか言ってください」

女子学生は真っ赤な顔になった。

「先生、その質問は男子学生が答えるほうが適当でないでしょうか」

教授は男子生徒のほうを向いた。しばらく躊躇した後で、彼は答えた

「人間の瞳孔です」

「けっこう」と教授は言い、冷笑を浮かべて女子学生のほうに向き直った。

「あまり大きな期待を持って、結婚生活に入ることはないようにおすすめします」

日進月歩

患者が夜眠れなくて困ると訴えた。医者は、寝る前になにか食べるようにしなさいと答えた。「でも先生」患者が抗議した。「二ヶ月前私が診ていただいたときには、寝る前にもものを食べてはダメだとおっしゃったじゃないですか」

「あなた、医学は絶えずめざましい進歩を遂げつづけているんですよ」医者は答えた。

秘訣

健康を保つ唯一の道は、食べたくないものを食べ、飲みたくないものを飲み、そして絶対にしたくないとおもっていることをすること、ただそれだけのことである。

しょげる訳

「元気を出したまえ」と医者がすっかりしょげている患者に言った。「私も昔この病気をしたことがあるんだ」患者は力なく顔をあげて言った。

「でも、先生は、ほかの医者にかかってたんでしょ？」

そのかた

夜遅くまで働いて医者が帰ってきた。今夜はもう何も起こらないでくれと願いながら。しかし、ベッドに入ったかはいらないかのうちに電話が鳴った。

医者は妻に言った。「私はまだ帰っていないつて言いなさい、いいか」

「ドクターは居ません」妻が電話に答えた。

「あっそう」電話の声が言った。「私、お宅の先生に診てもらっているんですけど、急に胸が痛んできたので、お帰りになったらすぐいらしてほしいんですけど」医者は妻に、そういった場合の処置法をささやき、妻がそのまま電話に告げた「そうすれば、まもなくきっとよくなりますよ」

「どうもありがとう」相手の婦人が言った。「ところで、あなたに指示なさった方、ちゃんと医師の資格を持っているんでしょね」

おお神様

医学生が夏休みの間アルバイトをした。昼は肉屋の助手として、牛、ブタなどの屠殺から解体を手伝い、夜間は近くの病院で働いた。両方とも長い白衣を着てする仕事で、若者はそれを好都合だと喜んでいた。

ある世、彼は病院で患者を手術室に運んだ。

患者は神経質な女性だったが、ふと運び手を見上げてびっくりして金切り声をあげた。

「おお、神様、この人、肉屋だわ」

礼

見知らぬ男が医院に立ち寄って医者に言った。「あなたの治療にお礼を申し上げたくて立ち寄りました」「でもきみはわたしの患者じゃないが…」

「そうです」と見知らぬ男は言った。「わたしの伯父が患者でした。あなたのおかげで、わたしは予想外に早く遺産にありついたわけでした…」

GOK

ある医師がある病院を訪問した。病室を見学したが、患者のベッドに GOK と書かれた

私があるのが目にとまった。どういう意味かと尋ねると、案内の医師が答えた「神のみぞ知る God only knows の略ですよ」

大丈夫？

医者患者の方に身をかがめて彼の胸をトントンたたき耳をすました。

患者が「先生どうしてそんなことをなさるのですか」と尋ねると医者は答えた。よくはわからないんだがね、でもよく映画の中でこんなふうに行っているじゃないか」

医者

健康がはびこることを恐れる唯一の人間は医者である

小猫ちゃん

家庭の平和である。暖炉の火はゆらぎ、妻は編み物にいそしみ、夫はコックを片手に夕刊に読みふける

「ねえ、あなた。猫って、嘔吐きで、偽善者で、不実で、泥棒で、それに、とっても残忍なんですって」

「そうだよ、小猫ちゃん」古典とは

みんなが読むべきだとは思っているが、誰も読まない本、それが古典だ

バラ

「失樂園」を著したイギリスの詩人、ミルトンは後に盲目になった。

彼は眼が見えなくなってから結婚したのだが、相手は、名だたる口うるさい女だった。ある時バッキンガム公が、彼女をバラにたたえたことがある。

「私は、ごらんとおり眼が悪いので、色や形はわかりません」

詩人は答えた。

「でもきっと閣下のおっしゃるとおりなのでしょう。

私は毎日、彼女のトゲを感じていまから」

N君がトイレに行くたびに、大の小部屋に入るのである。

並んで比較して泣くのは自分のほうと、確信しているが、と不審に思わざるを得なかった。

さては！」と閃いたことがあった。

15年も前だが、若いH君が、股白せんの自己診断遅延で長期放置があった。

或るとき、完治目前で、口が軽くなって「みんなに迷惑掛けたけど、」とどこが言った」とか。今でも、トイレで思い出す度に笑いが止まらないそうである。

N君の場合、幸いそうではなく、オランダの小便器が高すぎることに原因があった。

スキポール空港も高かった。最初は嘔吐の場所かと思った。どこか踏めば、水が出るかと探した。でも、民芸館はひどかった。バンドのすぐ下に器がある。つまり、指で上に向けての放水となる。

真剣な行動はスキが多い。隣の大きなオランダ人にはゆっくりと完全観察されてしまった。

日本語で「おー！手品ですね！」と言われてしまった。

指から水を出して見せていると思ったらしい。

『足が悪いんです』

『足が悪いんです、先生』

『どれ、みせてごらん』

男がズボンをまくりあげると、言うに言われぬ汚れた足が現れた

『いや、これは。足を洗っておくことはできなかったものかね。』

懸けてもいいが、こんなきたない足は町中探してもみつからないね』

男はにやりとした。

『その懸けは負けですよ、先生。もう片方の足をいまお見せします。』

ある医者が、天国の門の前にきた。生きているときにはどういう職業だったか、と、天国の門番をしている聖ペテロが尋ねた。

『医者だったんです』

『ああ、それなら』と聖ペテロは答えた。

『ここはちがうよ。納入業者がはいるのは裏口からだ。』

校長室の電話

が鳴った

『もしもし、生徒のライトナーは、今日学校を休みます。』

風を引いたものですから』

『そちらはどなた?』

『ぼくの父です』

有名な教授

が、金持ちの患者を治療した。

『先生、どうやってお礼の気持ちを表したらよいでしょう』

医者は答えた

『フェニキア人が貨幣を発明して以来、その疑問は意味を失ったと思いますがね』

盲腸

『盲腸を取らなければいけませんな』

『盲腸がなくても生きていけますか、先生』

とびっくりした患者が尋ねた

『あなたはだいじょうぶですがね、

われわれ医者はだめです』

『成功の可能性はどうでしょう、先生』

「ああ、わたしはこの手術がきょうでもう 97 回目ですからね」

『それで安心しました』

「うん、一度は成功させないとね」

手術台に乗せられた患者は、準備を眺めているうちに段々不安になってきた

『興奮して申し訳ありません。なにしろはじめての手術なので』

医者は、なだめるようにその肩をたたいた。

『わしもだよ』

医者の助手が机の上に一枚の書類を置いた

『この死亡診断書に署名をお願いします』

『ちょっと待って。さっきもう署名したんじゃないか?』

『ええ、でも先生は<死亡の原因>という欄にご自分の名前をお書きになったんです。』

『きょうは三日前よりも具合が悪そうですね』と医者は不思議そうに言った。

『毎日タバコはせいぜい三本から四本吸うことにしなさい、といったでしょう?』

そのすすめを守らなかったのですか』

『守りましたよ』と患者は不平を言った。

『でも、わたしはタバコを吸わない人間なので、とてもつらかったのです』

外科医は手術前になぜゴム手袋をはめるんだね?

『あとで指紋が見つからないようにするためさ』

体位

先生、私たち夫婦は後背位しかできなくなったのです。

不思議な症状ですね。例えば、こういうのはどうですか?

でも、それは、二人ともテレビを見ることができますか？

妊婦

大変セクシーな女性が混んだバスに乗り込んで来た
空いた席が無いと分かるとりっぱな紳士に話かけた
「席を譲っていただけませんか？私妊娠しておりますの
どうぞ」と譲った紳士は、みごとなそのプロポーションをながめながら
「いや、まったく妊娠されているとは、分かりませんな」と褒めた
ハイ、十五分前に妊娠しましたので

イタリア女の一生

ダヌンチオの弟子と自称する男が言った
イタリア女は、生涯に4度頬を染める
まず初めてするとき。
次は、初めて夫以外の男とするとき。
その次は、初めて金をもらってするとき。
4度目は？
初めて自分が金を払って、してもらおうとき、だ。

効きめ

老年の紳士が二人、茶飲話をしていた
「覚えているかね。戦争中のことだが、わしらが淫らな欲望に悩まされぬように
軍隊のコーヒーに何か薬が混ぜられていたのを
「覚えているけど、どうしてだね？
「どうも、効き目が現れて来たようなんだ

挑戦

老人が若者と、どちらが男らしいか賭けをした
老人は飲いぶりでも、食いぶりでも若者をしのいだ
最後に売春宿に行き、乳房や尻を見せつける女達の前で
老人はペニスを結んでみせ、
若者に同じようにやってみろ、と言った

70回

ある老人が、一晩に70回できると友人に吹聴していた
彼は、1回したあとシクティエ・ナインを1回するのである

老年

老年とは、かつて一晩じゅうやっていたことを一晩じゅうかかってやる、ということである

日記

ある男が20歳になったとき、日記にこう書いた

「今日、20歳になった。両手でやってもペニスを折り曲げられない

30歳になって、またこう書いた「今日、30歳になった。両手でやってもペニスを折り曲げられない」

40歳、50歳、55歳の時も同じように書いた

60歳になって「今日、曲げられた」と書いた

「私は強くなったに違いない」

名案

彼は象を一頭持っていた。貧乏になって来た彼は名案を思いついた。

サーカスで、3本の足を挙げて、一本で立つのを見たことがあった。

そこで広告を出した。

誰か彼の象に、脚を4本とも上げさせた者に一万ドル払う、正し、成否に拘わらず前もって、百ドル頂戴する」というものである

近くから、遠くから、大勢の人がやってきて、様々に試みたがうまく行かなかった

そんなある日、青いコンバーチブルが家の前に止まり、小柄な男が降りて来てレジエに話しかけた。

象の脚を4本とも上げたら1万ドルくれるというのはほんとうかね？」

「ほんとうさ。でも前もって百ドルいただくがね」

小男は車のトランクを開けて、ゴルフのクラブを一本取り出した。

小男は象の真ん前に歩み寄り、眼を覗き込んだ

それから象の後ろに回り、クラブで思い切り、象の睾丸をひっぱたいた。

象はひと声うなって、飛び上がった。

小男は1万ドルをせしめた

レジエはがっかりした

しばらくして、また名案がひらめいた

象は頭を上下に動かすことはできても左右に振ることはできないと思いついた

また、広告を出した

「象の頭を上下、左右に動かすことができた人に1万ドルを払う」と

多くの人々がやって来て、試みたが、うまくいかない。

すべてが、うまく行きはじめた頃
見覚えのある青いコンバーチブルが家の前に止まり、あの小男が降りて来た
「象の首を上下左右に動かしたら、1万ドルくれるというのはほんとうかね」
ほんとうだ」「ただし、前もって百ドル払っていただく」
小男はまた、ゴルフ・クラブを取り出した
男は象の真ん前に歩み寄った。
「おれを覚えているかい？」と小男はたずねた。
象は頭を上下に振って、うなずいた
「あれをもう一度やってほしいか？」
象はいそいで頭を横に振った。

地獄の門

若くてハンサムな神父のいる教会の日曜礼拝はいつも盛況だった。
婦人たちはその顔を見ただけでうっとりとしていた
「さて、お集まりのご婦人方、いすにすわったら、必ず脚を組んでください」
と神父は言った
ややあって、厳かな口調で
「皆さん、地獄の門は閉ざされました」と言って、おもむろに説教を始めた

集会

司祭が、信者たちに集会の知らせをした
「みなさん、礼拝の後、「はじめて母親になった女性の会を開きます。
どなたでも、初めての母親になりたい方は、私の部屋に来てください

一生の中に何千回も蚊を叩くつもりで、自分の顔を叩くのでしょうか
同じように、慌てて入ったお風呂が、熱すぎても、我慢してしまうものです。
そうしたある夜、ペニスの火傷をしそうになって、冷蔵庫を見ましたが冷えた牛乳だけ
しかありません
しょうがないので、浸けてひやしていました
通りかかった妻が見つけて「そうなの、そうやって補充するの」

新規開業

たとえ医者でも、新規開業はものいりだ。家賃は高いし、改造費、設備費は莫大だし、新聞の折り込み広告だってバカにならない。そのうえ、客はなかなかつかないし。

でも、やはり医者だから、一年もたてば、事業も安定する

「どうですか？」と融資した銀行家「ええ、なんとか」と医者

「きのうはじめて、患者さんに「あなたは病気ではありません」と言うことができました」

徹底した夫

離婚訴訟で細君が主張した

「判事様、私たちの長い結婚生活を通じて、夫がわたしに声をかけたのはたった四度でした。」

判事は細君の主張を容れて、細君に四人の子供の後見を認めた。

公園で

夜の公園でうっとりした声が漏れた。

「これが愛なのね」「いやー、これは性だよ」

セルフサービス

生活保護センターで、保護司が「結婚したことがありますか」

「二度ありますだ」保護司「子供さんは？」「六人ですだー」

「お父さんは同じですか？」「ちがいますだー。はじめの二人ははじめの亭主、次の二人は二度目の亭主。そして後の二人は自分でつくりましただー」

新しい体位

新婚旅行でナイアガラのホテルに泊まった二人、一週間も部屋に閉じこもったきりで食堂へも出てこない。

八日目の午後、はじめてテレビでも見ようと思った夫、新聞のプログラムを開いて、新婦に相談した。

「ね、キミ、今日の午後は“北極潜行”がいいか、それとも“月世界探検ロケット”がいいかい？」するとバス・ルームでシャワーを浴びていた新婦が、悲鳴にも似た声で答えた。

「もう、これ以上、新しい方法でなさろうとするなら、私は、母の所へ帰らせていただきますわ」

こびと

アフリカへ狩猟にやって来たアメリカ人夫婦が、ある日ピグミー族の部落に泊まることになった。しかし、小さいピグミー族の小屋に二人一緒に寝るこしができない。しかたなく、二人は別々の小屋におさまったが、夜もふけたころ、一つの影が夫人のベッドへ

忍びこんで行った。翌朝、夫が寝不足の顔で夫人にぼやいた。「マリー、ゆうべは小屋が小さく寝苦しかったろ？ピグミー族ってあれほど小さいとは思わなかったね」すると夫人がこれまた寝不足の顔で答えた。「ゆうべあたし、ピグミー族が小人だとは、とても信じられなかったわ」

正気の沙汰

ある精神病院の医者が患者に「大分よくなったようですから、もう四、五日すれば奥さんのもとに帰れますよ」と嬉しがるべき知らせを告げた。

「じ、じょうだんをおっしゃっちゃ困りますよ。先生」

とその患者がにがにがしく言い捨てた。「女房のところへ帰るなんて一先生、あなたはぼくがまだ気が狂っているとでも思っているのですか？」

人生の教室

美德を学ぶのは母の膝である。そして悪徳は他の女性の膝で教えられる。

抱き合わせはごめん

「君はどうして婚約を破棄したんだい？」

「ぼくらが住むアパートを探しに行った時、彼女のお袋が、これじゃ三人には狭すぎるって言ったからさ」

入れ知恵

娘「彼はとても親切よ。わたしが欲しいっていうものは何でもくれるの」

母親「それはお前のねだり方が足りないからだよ」

カマトト

24 時間の休暇で上陸した水兵が若い娘と知り合った。彼は女に飢えていたので、初心そんな娘を無理矢理ホテルに連れこんだ。「もし、9 ヶ月たって何かが起こったら」と彼は別れに臨んで娘に云った。「その結果にファニーっていう名前をつけないか？ぼくはその名前が好きなんだ」

「もし3週間たって何かが起こったら」と娘は答えた。「その結果を梅毒ってお呼びなさい」

女はパリ

「どこへ行くんだ。旅行鞆なんか持って」

「一週間ばかり、パリへ行ってくるよ」

「ほう、しかし、折角パリへ行くのに、君は奥さんを連れて行かないのかい？」

「不粹なことをいうなよ。ミュンヘンへ行くのに、ビールを持って行く馬鹿はいないだろ？」

愛情の現象

ある日のヌード・クラブで。木陰で二人がささやき合っていた。

「ぼくがどんなにあなたを愛しているか、あなたにはお分かりにならないでしょう」「うん、分かっていますわ。ちゃんとそれが手にとるように見えますわよ」

女子学生

日頃の遊びがたたって、卒業試験の答案を白紙のまま出したマギー。ついに決心して教授の部屋へ行った。

「先生、及第点を付けて下さい。先生のおしゃることは何でもしますから」

白い豊かな胸元を出し、ありったけのコビを見せて云った。

「なんでもするって」教授は、鼻メガネを掛け直して、マギーの顔から胸を見ながら云った。「はい、卒業させてくださるなら、なんでもしますわ」こういって、マギーは目をつぶって、ぷっくりふくれたクチビルを差し出した。

教授はおごそかな声で「それじゃ、勉強なさい」

まだ先が長い

一人の青年が宝石店に入ってきた。真珠の指輪を出し、それに名前を彫ってくれと頼んだ。「どういう御名前を？」と店の主人が聞く。

「トムよりベティーへと彫って下さい」と青年は照れくさそうに云った。

店の主人は指輪から顔を上げてしばし青年を見つめてから、諭すように云った。

「悪いことは申しません。ただ、トムよりと彫っておいた方が賢明です」

この女にしてあの娘

ある劇場のロビーで。タバコの火を借りに来た男が、やがて、したり顔で長嘆息した。

「全く、いまどきの若いもんには、あきれてものがいえませんな。

向こうにいるあの革のジャンパーにブルージーンズをはいた断髪のはれは、いったい男ですか、女ですか！」「失礼を！あれはわたしの娘ですがね」「はっ…？いやどうも、これは失礼申し上げました。あなたがまさか、あのお嬢さんのお父さんだとは思いませんでしたので」「な、なんですか？わたしは、あの娘の母親ですよ！」

女の脚

田舎からはじめてニューヨーク見物にでてた年寄り夫婦。

亭主がよそ見して歩いているうちに街灯に衝突してしまつた。

「とつつあん、変な目つきで娘っ子を見るのはよせってば。

こっちが恥ずかしいじゃねえか。女の脚を見たことがねえみてえだよ」

「そういえば、そんな気がしてたよ。おつかあ」

成功の秘訣

さる富豪が自分の成功談をひとくさり。「わたしがはじめてニューヨークへ来た時は、わずか一ドルしか持ってなかつたのです。」

事業に失敗した男が、目を輝かして聞いた。「ほう。その一ドルを何に投資なさつたんですか」事業家が得意そうに葉巻をくゆらした。

「それで電報を打つたのです。家へね。金を送れと」